

おろかな話

舞阪の水産実験所で働いていた時には今よりももっと近所づきあいをしていて、地元の人と良い関係を作るのは助教授の仕事という気持ちもあったし、子供が小さかったのでその必要があったということもあった。それ以上に、田舎町での近所づきあいというのが楽しかったということが大きい。わずらわしさを言い出せばきりが無いのだが、慣れてしまえば問題ない。人間関係さえうまく言っていればお祭りや季節の行事などそれなりに楽しいことが多い。東京への転勤が決まり最終的に家族で東京に住むことになった時、家を売ったり新しい家を探したり面倒なことが他にもいくらかあったが、とても小さなどうでもよいことで妙に気がかりなことがあった。舞阪に来て初めて戸建の家に住んだので、当初はうれしくて庭弄りに凝った。小さな庭のことであまり大きな木などは植えられず、もっぱら草花を植えた。中でも妻も私も気に入っていたのはクレマチスである。何かの催しの時に一株だけ買ってきて植えた。鋭角的な直線で構成され可憐というよりは気品を感じさせるこの花を嫌う人も少なくないが、とにかくその花はクレマチスの中のクレマチスというような、気品にあふれた真っ白い大輪の花を毎年咲かせた。ただ一つだけ困ったことがあった。毎年咲く美しい花は我が家の花に見えなかったのである。クレマチスはつる性の花で、我が家のクレマチスは弦を伸ばして隣家との間の生垣に、ちょうど隣家の玄関先を飾るように美しい花を咲かせるのである。隣家がどのように思っていたか聞いたことがないのでわからないが、多分、気に入ってくれていたのではないかと思う。私もたいそう気に入っていたので、引越しに際してはこの花を移植して新しい家でも楽しみたいと思っていたのだが、あまりに隣の玄関に似合っていたので、これを引き抜いていくのは隣家の玄関先の美しい飾り物を奪っていくような気持ちにさせられるのである。もちろん我が家のものであるから気にすることも無いのだろうが、ことさらに我が家のものだからもって行くというのも、いかにも狭量な人間することのように思われた。そもそも、そんなつらなことで悩むことが小人物の証でおおらかに考えればよいのだが、もって生まれた気性というのは変えられない。そんなつまらないことで悩んでいたある日、我が家の玄関脇の日陰に薄桃色の小さなシクラメンが咲いているのを発見した。小石や砂利をかき集めた建物の影にひっそりと咲いていた。察するに、以前、息子の誕生日に彼の祖母からもらったシクラメンの鉢から種が落ちて自生したらしい。毎年花が終わるとこの日陰に鉢を置いていたので、種が落ちてでも不思議ではない。しかし、それが根付いて自生するのは珍しい。掘り上げて新しい我が家に持っていけば、息子の誕生日にももらったものでもあるし、記念品的な意味もあってこれもまた楽しめるだろうと思ったのだがやめた。掘り上げて鉢に入れたところでシクラメンの鉢を何年も続けて咲かせることは難しい。庭に植えて自生させることはもっと難しいだろう。息子はこの地で多くの友達を作った。引っ越すことは受け入れていたものの、この土地に愛着を持っていることはそのそぶりから良くわかる。それならばこの土地で少年期を過ごした息子の記念としてシクラメンをこの地に残してひっそりと人知れず咲かせ、そのことを毎年思い出す方がいっそうゆかしいような気がしたのである。その時、あのクレマチスもそのま

ま残しておくことを決めた。毎年美しい花を咲かせ、隣家も含めて仲の良かった近所の人々
がその美しさを楽しんでくれれば良いとおもったのである。話はこれで 終わりなのだが、
書きたかったのはそのことではない。この判断はかえって困った結末を生んだ。私はクレマ
チスが今でも毎年、隣家の玄関先 を飾るように咲いているかどうか確かめたくるのであ
る。それならば、季節になったら元の家近所を訪れて自分の目でそれを確かめれば良さそ
うなものだが、一方で、もうあのクレマチスは咲いていないのかもしれないという気持ち
もある。もしクレマチスがなくなっていけば、新たに我が家を買ってクレマチスを引
き抜いてしまった家族 に不満を持つだろうし、クレマチスを大切にしてくれなかった近所
の人々に不満を持つかもしれない。そのことが不安で確かめに行けないのである。結局、
余計なことをしたために、古い友人を訪ねるのに障害を作ってしまった。小人物というのは
度し難いものである。

(20150304)